

立ッ鳥会議第9回公演「そびれるしま」(作・植松篤)

【登場人物】

ミナト……熊谷帆夏(劇団アングラ・ステーキ)

リク……ぬまたぬまこ

行晴……ルーデルマン大地(遊劇舞台二月病)

町田……荷車ケンシロウ(劇団不労社)

三塚(紗英)……きやな子(劇的☆ジャンク堂)

鴨原……七江夏妃(シイナナ)

※

この戯曲では、過去と現在の二つの時間における一つの家の様子が交互に、または同時に描かれる。

過去は平成、現在は令和のある年に当たる。二つの時間の間には概ね20年の開きがある。過去編では平成のある年の春から夏にかけての数カ月、現在編では令和のある年の一日の日中から深夜までが、それぞれの時系列に沿って展開される。

前説では必要に応じて、喫煙シーンに関する適切なアナウンスが入る。

(例)「劇中、煙草を吸うシーンがございますが、ニコチン・タール等を含まない舞台用の小道具を使用しております。あらかじめご了承ください」

【舞台設定】

某県郊外の一軒家。舞台は和室の居間。奥に廊下があり、上手は一つの部屋につながっている。下手側には他の部屋や玄関、台所など、住戸内の大部分を想定する。

和室部分の手前、客席側には板張りの内縁があり、上手には籐椅子が2脚置かれている。和室内には少なくとも仏壇、座卓、座布団、テレビがある。これらは二つの時代に共通して存在する。従って、テレビは平成の型式のものである。

①

過去（平成）。

父親の行晴が、肘枕で寝転がり、ぼんやりとテレビのニュースを見つめている。息子で中学1年生のミナトは離れた場所で『ONE PIECE』のX巻を読んでいる。

行晴 デフレ、デフレ……。 （間） 巨人、巨人……。 （間） 小学校に全裸の男、小学校に

全裸の男……。 お手柄警察犬、お手柄警察犬……。

ミナト お父さん。

行晴 どうした、何か悩みでもあるのか。

ミナト は？

行晴 ミナトも年頃だな。

ミナト さっきからブツブツうるさいんだけど。

行晴 興味深いニュースあったか。やっぱり全裸か。

ミナト 何かは聞いてないよ、今（漫画）読んでるんだから。

行晴 海賊が頑張るやつか。

ミナト そうだよ。

行晴 お前ももう中学生なんだから、そろそろNHKに興味を持ってもいい頃じゃないのか。

ミナト いいよ、そういうのは。

行晴 どうだ、中学校は。

ミナト だからなんだよ急に。

行晴 小学校からメンバーも変わったろ。いろんなところから集まってきて。

ミナト そういうものだから。

行晴 よろしくやってるのか。

ミナト よろしくやってるよ。

行晴 よろしくって……。 どういう意味だ。

ミナト そっちが言ったんでしょ。

行晴 そうだけど、その、ミナトの中ではどういう意味で言ってるんだ、具体的に。

ミナト だから……。 別に普通だよ。 普通。 終わり。

行晴 （仏壇に）母さん、これは来てる。これは来てるよ。いわゆる、いわゆるそういう時期が来てる。

ミナト 何してんの。

行晴 お父さんは心配なんだよ。

ミナト まずさ、そんなに心配してないでしょ。

行晴 まあ、確かにミナトに関してはそんなに心配してないかもしれん。

小学4年生のリック、上手から廊下に現れる。眼鏡をかけ、家の中なのになぜか帽子をかぶっている。以降、リックは常に帽子をかぶっている。

行晴 リク。

リック ……トイレ。

リック、そのまま下手側へ去る。

行晴 リクはまた押し入れに引きこもってるのか。小4ってあんな感じか？

ミナト 学校でまたからかわれたんでしょ。

行晴 なんで帽子かぶってるんだ。

ミナト 知らん。

行晴 ……ミナトさあ。

ミナト 何。

行晴 お父さんは君自身に関しては何も心配してない。……リックのことはいいからな。

お父さんの仕事だからな。

ミナト 何もしてないよ。

行晴 そんなこと言って、また揉めたんだろ、リックの友達と。

ミナト 友達ではないから。

行晴 お父さんね、怒られる側になっちゃってるから。

ミナト 何が。

行晴 この前、小学校に呼ばれたよ。お父さんてつきり、先生に謝られるのかと思って。

おたくのリック君にはご迷惑をおかけしてますって、子どもたちには厳しく言って聞かせますからって。だから、こっちも鬼の形相で行くじゃない。

ミナト どんな顔？

行晴 それで学校行ったらさ、先生が……え、何？

ミナト 鬼の形相って、どんな顔？

行晴 どんなって……。

ミナト (今) やってよ。

行晴 だから…… (鬼の形相をして) こんな顔だよ。

ミナト それで？

行晴 え？

ミナト それで、どうなったの？

行晴 だから、行ったら、おたくのお兄さんが年下の子をいじめてます、みたいなことを言われるわけよ。家でどう教育してるんですか、とか言われるわけよ。

ミナト それで？

行晴 え？

ミナト それで、どんな顔になったの？

行晴 どんなんて……。〔え？〕みたいな中途半端な顔をする〕

ミナト 情けない。

行晴 いや、違うよ？

ミナト 元々悪いのは向こうなんだから。

行晴 分かってる。

ミナト 鬼の形相のままでいいじゃん。むしろ言いがかりなんだから、いちゃもん付けられたんだから、更に鬼の形相になってもよかったじゃん。

行晴 分かってるよ、分かってるんだけど、予想外だったから、展開が。予想外すぎて、頭真っ白になっちゃって、なんなら、ちょっと何言ってるか聞き取れなかったから。ね？ そういう顔（と、また中途半端な顔）。

ミナト ……。

行晴 ごめん。言いたいことは分かってるよ。

ミナト いや、いいよお父さん、一人親で忙しいんだから。任せてよ、リクのこととは。

リク、戻ってくる。

行晴 リク、ちょっとこっち来なさい。ちょっと話をしよう。学校で嫌なことあったのか。

しかし、リクはそのまま上手へ退場。

ミナト 気分じゃないってさ。

行晴 気分じゃないのか。

ミナト あいつがうじうじしてるのも悪いんだよ。あと、たまに油断して隙見せるから。

行晴 隙？

ミナト 去年の12月25日に地域のクリスマス会行ったでしょ、兄弟二人で。

行晴 川上さんのところだろ？ お前もいればいいだろうと思っただけだ。

ミナト あそこはれっきとした教会だから、遊ぶだけじゃなくてクリスマスソングも歌わされるし、お説教みたいなものもあるわけ。キリスト教について勉強しましょうって言って「今日は誰の誕生日でしょう」みたいな感じのことを聞くわけ。それならリクが手挙げて。

行晴　へえ、偉いね。

ミナト　なんて言っただと思う？　「天皇誕生日」って。

行晴　……。

ミナト　「キリスト」教だっつってんのに。

行晴　まあ天皇誕生日も近いからな……。2日違いだからな。偉い人が生まれる時期なんだろうな。

ミナト　リク、それでまた馬鹿にされて。それは自分のせいだと思わない？

行晴　過ちは誰にでもあるからな。

ミナト　まあ、すぐ学校で言いふらす連中も連中だけど。

行晴　神の子がね、わざわざ酷いことするもんだな。信者の子たちもいるだろうに。

ミナト　布教が好きな連中なんだよ。

行晴　なかなか凄いいこと言うね君も。いや、笑い事じゃないんだが。

ミナト　お父さんは笑っていいよ。忙しいんだから。

行晴　……何かできることないかな。

ミナト　じゃあ今、何か買ってきてよ。オーヤママートで。アイスと飲みもん、リクのも。

行晴　いいけど……もう昼飯も食べたのに。

ミナト　いいでしょ別に、デザートなんだから。

行晴　分かったよ。

ミナト　ジャンプもあったら、多分ないけど。オーヤマ2、3冊しか仕入れないから。

行晴　漫画ね、はい。

行晴、下手に退場。

ミナト　リク、お父さん買い物行かせたから。でも指定し忘れたからアイスのセンスはどうだろうな。そこは運試しだな。(間)……なあ、ちょっと出てきなよ。

リク、出てくる。

リク　……言わないでほしかったな。

ミナト　ん？

リク　クリスマス会のこと。

ミナト　あ、聞こえてた？　ごめんて。リクが悪いなんて思ってないよ。全部向こうが悪いんだから。またぶん殴っておくからな。……押し入れ、そんなにいいかね。喘息もあるのに。

リク　喘息は最近出てない。

ミナト だいたいもうキツキツなんじゃないの？ 体だって幼稚園児とか、低学年じゃな

いんだから。身長体重いくつ？ 春の健康診断あったでしょ。

リク 覚えてない。

ミナト そっか。……で、なんだよ、その帽子。今はそれが安心するのか。

リク うん。

ミナト (帽子を取って頭をなで) こっちとどっちが安心する？

リク (少しの間までられてるが、やんわりとほどこいて帽子をかぶり直す)

ミナト 何恥ずかしがってんだよ。昔からしてきたことじゃん。

リク、上手の部屋へ退場。

ミナト リク、照れるなって。兄弟はずっと兄弟なんだから。そうだろう？ ずっと前から

兄弟で、これから先もずっと兄弟なんだから、仲良くしようぜ。リク、お前が守
ってほしいと言え、これからはずっと守ってやるからな。ずっとずっと。……

なあ、聞こえてるだろう？

場転。

②

ミナトが去るとそこには町田が呆然と立っている。遠い記憶に心を掬め取られたよう
に動かない。

現在 (令和)。

三塚が下手から入ってくる。

三塚 ねえ。

町田 ……。

三塚 ねえって。

町田 ん？ ああ、ごめんごめん。

三塚 何してるの？

町田 ……今さ、天皇誕生日っていつだっけ？

三塚 は？

町田 てか、俺そもそも知ってるか？ 天皇誕生日。今の。

三塚 嘘でしょ。

町田 待って、いったん何月かだけ教えて。

三塚 2月。

町田 2月? ……2月て(笑)。

三塚 は?

町田 2月ってそんな……天皇誕生日って月でもないでしょう。

三塚 何言ってるの?

町田 だって2月にアニバーサリーなんてことある?

三塚 ……23日。

町田 2月の?

三塚 うん。

町田 いや、そんなわけないわ! 全然ピンと来ない。

三塚 あり得ないでしょ。今、令和何年よ。

町田 俺が平成に取り残されてるだけなのか? 令和が俺に背を向けているのか? で

も2月が天皇誕生日って……ねえ。

三塚 私の誕生日も2月だけど。

町田 ……いやいや、そういうことを言ってるんじゃない、覚えてるよ? それは。

三塚 アニバーサリー。

町田 いや、それとこれとは話が別でしょ! 俺が言いたいのは国民の祝日としてのし

っくり感というか、肌感というか……ね?

三塚 うん、どうでもいいんだけどさ。

町田 はい。

三塚 ……いないの?

町田 あ、うん、いないね。バイクもないからね。

三塚 え、いないの?

町田 だからいないって。なんで?

三塚 いや、なんでっていか。

町田 ……あのね、これは何回か話したことだと思っけども、家にこもってるって言うた
って、部屋から一切出ないってことでは全然ないのね。たまには外にだって出る
し買い物だって行くし、なんなら働いてたこともあるから。今は何もしてないけ
ど。部屋の敷居をまたがないとか、お風呂は何カ月1回とか、そういうことでは
ないんですよ。

三塚 うん、それは分かってるよ、聞いたから。

町田 でも、やっぱりそういうね、イメージを持たれがちだから。

三塚 じゃなくて、いるって聞いてたから、今日は。

町田 いるはずだったんだけどね。まあ大人同士、いちいち全部管理してるわけじゃない
し。

三塚 だって、私と会うための日でしょ。

町田 会う気分じゃなかったのかな。

三塚 それじゃ私、何しに来たのよ。

町田 でも、一度家に来てほしいとは思ってたから。こうしてはるばる、交通の便の悪いところに来てもらうだけでもさ、意味はあったと思うよ。

三塚 職場、ここから通ってるの？

町田 うん。

三塚 遠くない？

町田 遠い。

三塚 賃貸借りたら？

町田 いや、慣れたらそんなに遠くないから。

三塚 そう。

町田 まあ、せっかく来てくれたんだし、ゆっくりしていつてよ。あいつも、ふらっと帰ってくるかもしれないからさ。

……（居間へ入る）。

町田 （座卓や座布団を整えながら）居間、埃っぽくてすまんね。来客なんか久しぶりだから。床の間の隅とか、あんまり見ないでいただければ。

三塚 （縁側から外を眺めている）

町田 空き地、多いでしょ。

三塚 うん。

町田 ここはね、水際なんだよ。

三塚 水際？

町田 高度経済成長の頃に土地が高騰して、開発の波が東京からここまでやって来た。そうは言ってもみんな投機目的でね。宅地だけ買って家なんか誰も建てやしなかった。オイルショックで弾けてからは見向きもされなくなったけど、今度はバブル景気が来た。都会でマイホームを買えない人がぼつりぼつりと流されてきて、ようやく戸建てが何軒か建った。

三塚 その頃に建てたのね、ここも。

町田 俺ら子供二人が生まれたタイミングだからね。さっちゃんだって生まれ年は俺と同じでしょ。

三塚 でも家のことなんか、そんなに考えたことない。

町田 さっちゃんの良いからね。

三塚 それ、やめてって言うてるでしょ？ 普通だから。

町田 まあうちは金がなかったのもあるけど、母親の体が弱かったから、縁が多いところに引っ越そうという心づもりもあったらしくて。その頃東京はまだ、空気が汚いイメージも残ってたからね。（仏壇を見て）結局、母親は早くに亡くなってしまったけど。

三塚 お父さんは、いつ？

町田 もう5年前かな。あそこの葬儀屋に頼んだよ。来るときあったでしょ、国道沿いに。

三塚 あったつけ。

町田 元はラブホテルだったんだけどね。少子高齢化だよな。

三塚 ……どうでもいいけど。

町田 そうか。まあ、父親も今思えば随分苦労してたよ。面倒臭い兄弟の面倒一人で見て、高値掴みの住宅ローンも頑張って返済してさ。まあ、最後は病気で死んでチャラにしたけど。何でも時代のせいにしたってしょうがないわな。しばらく冷凍睡眠してるってわけにもいかないんだから。

三塚 (仏壇に) ご挨拶していい？

町田 ん？ ああ、もちろん。火、どこだっけな……。

町田、着火ライターを発見し、ろうそくに火を灯す。三塚、仏壇の前に膝を突き、線香を上げ、鈴(りん)を鳴らし、手を合わせる。

三塚 ……ねえ。どう紹介すればいい？

町田 何が？

三塚 私のこと、(仏壇の)ご両親に。

町田 何でも言えればいいじゃない。ご出身でも、学歴でも、職場でも、好きな食べ物、果物とかでも。

三塚 そうじゃなくて。

町田 ん？

三塚 婚約者？ 私。

町田 まあ……いずれはね。

三塚 いずれはって決まってるなら今もそうなんじゃない？

町田 順序があるからさ、こういうのは。

三塚 ご兄弟に許可を頂く方が先？

町田 許可とかそういうことじゃないけど……。ただ、事情はあるわけだから。さっちゃんにとつても、先にこういう機会があった方がいいと思うし。

三塚 こういう機会があつて、最終的にはどうなるの？

町田 え？

三塚 私、何か手伝わなければならない？

町田 そんな急に具体的な話はしないよ。

三塚 でも……子どもの頃からずっとなんでしょ？

町田 まあ……。

三塚 何も気にしなくていいってことにはならなそうだけど。

町田 なんにしたって、今ここで二人で話してもしようがないから。仏壇の前で話すことでもないし。

三塚 ……（仏壇に）好きな食べ物は白玉ぜんざいです、好きな果物は高い桃です、好きな動物はハリネズミです。

町田 ……ハリネズミなんだ。

三塚 あと、婚約者ではなくガールフレンドらしいので、そこんところしくお願いします。

町田 ……。

三塚 お腹空いてきちゃった。

町田 買ってくるよ。今、何もないから。

三塚 え、私も行く。

町田 いいよ、疲れてるでしょ。こんなところまで来て。

三塚 いいよ、行くよ。

町田 車出さなきゃだから。この辺、全然店ないんだよ。

三塚 でも……。

町田 もし、あいつ帰ってきたら話しといてよ。

三塚 困るよ、そんなの。

町田 まあ多分、帰ってこないから。何食べる？

三塚 ……甘いパン何か。あとヨーグルト。

町田 午後ティーのストレート？

三塚 あれば。

町田 あるよ、イオンまで行くし。昔は近所に地元のスーパ―があったんだけどね。もう潰れちゃったけど。オーヤママートって知ってる？

三塚 オーヤママート？

町田 知らんでしょ？ もう響きからしてローカルだよ。語感が変というか語呂が悪いというか。なんかマが続いて言いづらいし。何でこんな名前にしたのかな。

三塚 （笑って）結婚したのかな？

町田 え？

三塚 結婚した名前変わったんじゃない？ オーヤママートに。

町田 ……その発想はなかったわ。

三塚 柿ピーも買ってきて。

町田 好きだね。了解。

町田、退場。三塚は居間を見渡し、縁側から外を見る。

三塚 隣はソーラーパネルか。

三塚、縁側の藤椅子に座り、『ONE PIECE』のY巻を読み始める。

③

過去。ミナトとリク。ミナトは床に大の字に寝転がり、リクは居間のやや隅に座っている。季節は夏に近づいている。

ミナト ……なあ。

リク 何。

ミナト 暑くね。

リク 暑い。

ミナト 扇風機出すか。

リク 早いよ、まだ。

ミナト いいじゃん、昼カレー食べたんだし。

リク 理由になってないよ。

ミナト クーラー付けるか。

リク クーラーなんか、もっと早いよ。

ミナト 時期は一緒だろ。

リク 電気代がかかるよ。

ミナト あ、そうだ。

ミナト、一度退場し、うちわを持って戻ってくる。

ミナト 1本しかなかったわ。

ミナト、自分をおおいで「あー」と言った後にリクをおおぎ、

ミナト 涼しい？

リク 涼しい。

ミナト 押し入れの中、暑いだろ。

リク 今日は入ってないし。

ミナト 今日とかじゃなくてさ。熱射病になるよ、マジで。

リク 別に、大丈夫だから。

ミナト ……うちわってさ、涼しい分結局疲れるから意味ないよな。

リク 代わるよ。

ミナト じゃなくてさ、極力疲れずに涼しさを最大化するあおぎ方をマスターしたいんだよな。

リク 何それ。

ミナト だからさ……。

ミナト、リクに対していろんなあおぎ方を試す。縦に横に、大ぶりにしたり細かくしたり……

ミナト どう？

リク え？ 涼しいよ。

ミナト じゃなくて、比べてくれないと、どっちとか。

リク あ、ごめん考えてなかった。

ミナト なんだよ、やり損じゃん。

リク 自分の方向けてやればいいのに。

ミナト まあ、そうか。

ミナト、自分をいろいろあおぐ。間。

ミナト よし、キャッチボールするか。

リク なんで急に。

ミナト 思いついたから。

リク 最近全然してない。

ミナト 別にいつしたっていいだろ。

リク そうだけど。

ミナト 隣の空き地、いけるでしょ。夏草まだだし。

リク でも……空き地だって誰かのものでは？

ミナト え？

リク 今は使ってなくても所有者がいるんだから、勝手に使ったら駄目だよ。

ミナト 子供の頃からずっと遊んだのに？

リク それは……よく知らなかったから。

ミナト バカだったから？

リク そう。

ミナト そうか。じゃあ今はもつとバカだな。いいか、中途半端に物を知ってるのが一番駄目だから。守らなくていいルールは守らなくていいんだよ。

リク ……そうかなあ。

ミナト キャッチボールってかさ、もう打ってもいいんじゃない？ あ、でもバットなかったか。

リク どこかにあったと思うけど。昔、お父さんに買ってもらったの。

ミナト いや、この前探したんだけどなかったんだよね。多分、使わないからって捨てたんだよ。

リク ……。

ミナト グローブ取ってくるから先出といてよ。……何？

リク バットないんだ。

ミナト うん、なかったよ。結構探したけどな。庭の倉庫とかもさ。

リク なんて？

ミナト え？

リク なんて探したの？ なんの時に？

ミナト それは……まあ、ぶっ殺そうと思ったからだよ。

リク ……。

ミナト でも結局なかったから。素手で行くしかなかったよ。

リク お兄ちゃんの方がよっぽどバカじゃん。すぐ殺すとか言って。どうせ、できないのに。

ミナト 大丈夫だよ、そんなに危ないことはしてないから。ちょっと脅かしたただだよ。でもリクも良かったろ？ あれからちょっと、しおらしくなったんだから。

リク ……。

ミナト 別に恩を着せる気はないよ。やりたくてやってるだけだし。……まあ、いいよ。キャッチボールやろうぜ。……あ、でも一つだけ訂正させて。

リク ……何。

ミナト 俺は殺すべきだと思ったらちゃんと殺すよ。

ミナト、突然うちわでふざけて退場。

リク ……やっぱりバカだ。

リク、追って退場。

④

玄関のチャイムが鳴る。現在。藤椅子で漫画を読んでいた三塚が顔を上げる。

三塚 (慌てて) え、帰ってきちゃった? あ、でもピンポン……?

立ちかけた三塚、座り直す。すると2回目のチャイムが鳴る。三塚、様子を窺いつつ玄関へ向かう。

三塚 (声だけが聞こえる) はーい……。あ、どうも……。あの、えっと……。え? ああ、ちよつと……。

思い詰めた表情の高齢女性、鴨原が入ってくる。追って、三塚が困惑しながら戻ってくる。

鴨原 (腰を押さえ) あ……。

三塚 (支えて) 大丈夫ですか?

鴨原 すみません、腰が悪くて。骨も脆いものですから。

三塚 ……あの、どなたですか? お隣さん……ではないですよ。隣ソーラーパネルですしね。

鴨原 あなたは?

三塚 私ですか? 私はなんと言うか……。

鴨原 ご家族の方ですか?

三塚 家族……ではないです。

鴨原 え? じゃあ、

三塚 いや、なんて言うんですかね、でもほぼ家族に近いというか配偶者というか……。

鴨原 ……?

三塚 ギリまだ配偶はされてないんですけど、まあ、配偶しかけというか、今にも配偶しそうというか。

鴨原 配偶?

三塚 あの、知人です、この家の方の。怪しい者ではありません。すみません、今、誰もいなくて……。

鴨原 そうですか……。いや、でも逆に良かったかもしれません。

三塚 あの、ご用件は……私がお受けできることでしょうか。

鴨原 母が他界しまして。

三塚 ? ……はあ。

鴨原 ちょうど80でした。傘寿のお祝いをしたところだったんですが、しかし、まあよく生きました。大往生です。介護もまあ、やりましたけど、人並みで抑えてくれました。

三塚 ……そうですか。

鴨原 通り沿いの葬儀社さんをお願いして、本当に小さなお葬式を挙げまして。ご存じですか、そのの。

三塚 あ、はい。

鴨原 昔はラブホテルがあったところなんですけど。

三塚 ……え？ あ、それも、なんか、はい。

鴨原 それでね、父も亡くなっていますので、私一人になってしまったものですから。実家は売って、アパートに引っ越すことにしたんです。駅の近くの、市の出先があったところを取り壊して三つ四つ建ったでしょう。

三塚 あ、ごめんなさい、私あまりこの辺り詳しくないんですが。

鴨原 そうですか。

三塚 ……ええと、それで？

鴨原 家を引き払う準備で荷物をまとめていたら、押し入れの中から古い紙袋が出てきましてね。これ……恐らく、こちらのお宅にあったものかと思ひまして。私もすっかり忘れていたのですが、こうしてお預かりしたままだったようで、今更ではあるんですけど、お返しに上がったという次第でして。

三塚 ……はあ。

鴨原 これなんですけど（と、紙袋から置き時計を取り出す）。

三塚 ……時計？

鴨原 はい。お家の方にお渡しただけませんか。

三塚 えーと、お待ちになりますか？ 多分、もうすぐ帰ってくると思うんですが。

鴨原 ……いえ、結構です。

三塚 あ、お名前は……。

鴨原 ……名前も、今となつてはあまり意味のあるものではありませんから。

三塚 え？ いや、でも……。

鴨原、構わず時計を座卓に置く。

三塚 あ……。

鴨原 すみません。

三塚 いえ……私はいんですが。

鴨原 （ふと仏壇が目に入り）……あの、この家のご主人は……。

三塚 ご主人？

鴨原 ……行晴さんは。

三塚 ああ……確か、5年前に亡くなったと聞いていますが。

鴨原 ……そうですか。もう随分ですものね。

三塚 お知り合いなんですか。
鴨原 ……あなた、お名前は？
三塚 三塚です。
鴨原 お幸せになさってね。

鴨原、足元を確認しながらゆっくりと退場。三塚、しばし呆氣に取られるが、玄関の方から大きな物音が聞こえ、慌てて後を追う。

三塚 あ、玄関、段差気を付けて……。

⑤

過去。夕方。リクが上手側から現れる。下手側からミナトがやってくる。ミナトは中学校の制服を着て鞆を肩にかけている。

リク あ。
ミナト おう。ただいま。
リク おかえり。
ミナト 今日は元気？
リク まあ。
ミナト どうか行くの？
リク いや、水飲むだけ、台所で。
ミナト そうか。
リク え、今帰ったの？
ミナト え？ うん。
リク 遅いね。
ミナト あー、まあそうかな。
リク 帰宅部なのに。
ミナト よく知ってるね、そんな言葉。
リク 帰宅部ならすぐ帰宅しないと。
ミナト 寂しかったか。ごめんな。
リク ……そうじゃないけど。
ミナト なんだよ。
リク 学校サボってるの？
ミナト ……なんで？

リク 見たって言われたから。街で昼間から、自転車乗ってフラフラしてたって。
ミナト マジで？ いつの時？

リク そんなに、いつもなの？

ミナト いやいや、そんなことないけどさ。でも、あれだよ？ 俺は別にいじめられてるとかじゃないからな。

リク 知ってるよ。じゃあ、なんでよ。

ミナト なんてだろうな……。なんか、だるいんだよな、いろいろ。気が乗らないというかさ、よく分かんないけどな。

リク 不良じゃん。

ミナト 別にやることはやってるからな。中間テストも普通だったし。お父さんに言うなよ。

リク 言わないけどさ。なんもないんだったら行けばいいのに、学校。せっかくなんだから。

ミナト リクからしたらそうかもしれないけどさ、まあ、いいじゃん、適当で。

リク 適当って。

ミナト マウンテンバイク欲しいな。坂とかしんどいし。

リク ほら、全然悪いと思ってない。

ミナト 水飲むんだろ？ 俺も飲むわ。

ミナト、リク、下手側へ退場。

⑥

過去の後日。行晴が上手側のリクの部屋に向かって声をかけている。

行晴

リク……リク！ 今日はまだ押し入れか。押し入れの日なのか。今日はちょっと出てきてほしいんだけどな。気が進まないのは分かるんだけどな、ちょっと顔見せてくれないかな。な？ ちょっと入るからな……。

行晴、上手側へ退場。ややあって、リクを無理やり連れて出てくる。

行晴

はい、はい、はい！ 怖くない、怖くない！ まあ、まあ、まあちょっと座りなさい、ね。

リク、しばし部屋に戻ろうと抵抗するが、やがて諦めたように座る。

行晴

まあ……なんだ、事情は分かっているつもりだし、それについてお父さんも力になりたいと思ってる。その上で、もう小学4年生で身長も体重もついてきた君が、押し入れの上限に布団と一緒に乗ることの危険性について、お父さんはいったん共有したいと思ってる。

……。

行晴

……いや、君の口からみなまで言う必要はない。何も男の子としての君の尊厳を傷つけるつもりはないんだ。つまりは安心するんだろう？ 昔から押し入れ探検で遊んでいた馴染みの場所、布団に包まれる感覚、狭い空間であればあるほど安全だと感じられる、そう、まるで胎内のように。そういった君の感覚はごく自然なものだ。恐らく科学的にも裏付けがあるだろう。だが考えてほしい。上段に布団と君の重さがあつたら、いずれ棚板が抜ける。これも科学的な事実だ。

……。

行晴

お父さん、新築の時立ち会ったけど、業者の人もそんなにやる気がある感じじゃなかったから。多分、ギリギリ訴えられないくらいにしかやってないから。下、抜けて腰打ったら痛いぞ……。教室で突然、椅子を下げられるようなものだからな。……あ、いや、別にこれはものの例えで……。

下げられてないよ、椅子は。

行晴

……そうか。まあ、まとめると、お父さんはリクの将来がちょっと心配なだけなんだが……。

玄関のチャイムが鳴る。

行晴

ああ、来た来た。(リクに)そこを動くなよ。

行晴、退場。以下、玄関の方から声だけが聞こえる。

鴨原

ごめんなさい、遅れてしまつて。

行晴

とんでもないです、けっこう遠かつたでしょう。

鴨原

間に合うと思つてたんですけど、土地鑑がなくて。信号も妙に引つかかつちゃつて。もう無視しちゃおうかと思つたんですけど。

行晴

知らない土地の赤信号はね、守った方がいいですよ。車の方がどういうつもりか分かりませんからね。その通り、直線でみんな結構飛ばしますよ。不良連中なんか歩行者見てないですからね。

鴨原

それは、うちの方も一緒です。

行晴

そうですか。

などと、行晴と鴨原がにこやかに話し込みながら姿を見せる。行晴と鴨原は同年齢くらいである。

鴨原 (リクを見て) あ、ひょっとして……リク君？

リク え？

行晴 そうです。弟のリクです。

鴨原 (リクに) 初めまして。

リク ……初めまして。

行晴 (リクに)こちら、鴨原さん。駅前のスーパーで働いてて、仲良くなったんだよ。うちのことを話したら、ちよくちよく手伝いに来てくれるって言うてくれて……

鴨原 (鴨原に) あれ、どうしました。

鴨原 (時計をじっと見ている) あれ……。

行晴 何か、ありましたか。

鴨原 私、時間、間に合いました？

行晴 え？

鴨原 ……あ、この時計、もしかして遅れてます？

行晴 あ！ そうですそうです。5分くらい遅れてるんですよ。

鴨原 やっぱり。

行晴 いやー、久しくこの状態だったから全く気にしていませんでした。男だけの家はズボラでいけませんね。

鴨原 これ、直してもいいですか。言っておいてあれですし、私、何か間違えそうで、あ、なんかすみません。そうですよね。これからちよくちよく来ていただいたら、混乱しますもんね。これじゃあ。

ミナトが入ってくる。

行晴 おお、ミナト。

ミナト 誰？

行晴 こちら、鴨原さん。まあお父さんのお友達だな。駅前のスーパーで出会ってな。

鴨原 (鴨原に) これが長男のミナトです。

鴨原 初めまして。鴨原です。

行晴 ああ、これで町田家がそろいましたね。ミナト、リク……行晴。3人家族、勢ぞろいです。

ミナト (鴨原に) 家、どこですか？

鴨原 え？

ミナト 家、どこですか。

鴨原 ……あ、私の家？

ミナト ホームの方ですか？

鴨原 ホーム？

行晴 そうだよ。そうだとしたらなんなんだ。

鴨原 ええと……ホームって……。

行晴 子供らがそう呼んでるってだけですよ。

鴨原 ああ。

ミナト 何歳ですか？

鴨原 え？

行晴 ミナト。

ミナト 年はいいです。子供は何年生ですか？

鴨原 子供？

ミナト 男子ですか、女子ですか。

行晴 やめなさい、失礼だろう。

ミナト ていうか名前、なんでしたっけ？

鴨原 ……鴨原です。

ミナト リクー、鴨原って知ってる？ 鴨原、いたかな。

行晴 ミナト、いい加減にしなさい！

鴨原 ……あの！ 私、離婚して実家に戻ってきたの。子供もいません。

ミナト ……そうですか。それはすみませんでした。

鴨原 ……。

ミナト ちょっと出てくる。

ミナト、退場。

行晴 すみません、失礼な奴で。

鴨原 いえ……。私、

行晴 子供の喧嘩ですよ。どこ行くんだか。

行晴、追って退場。

鴨原とリク、居間に取り残される。気まづさが漂う。リク、突然立ち上がり、自室へ向かおうとする。

鴨原 リク君、漢字！

リク （振り返って）……え？

鴨原 リクの漢字、どうやって書くの？ お父さんから聞いてなかったと思って。

リク ……理科の「理」に「空」です。

鴨原 そうなんだ、カッコいいね。

リク ……。

鴨原 マドレーヌ、食べない？

リク ……いいです。

鴨原 遠慮しないで。

リク、おずおずと座り直してマドレーヌを受け取る。おずおずと食べる。

鴨原 おいしい？

リク ……うん。

鴨原 私の働いてるスーパーで一番売れてるお菓子。うちのスーパーで一番人気のお菓子。

リク ……。

鴨原 ……私この前スーパーでね、店内放送してたんだけど、その後マイク切り忘れちゃって、そのまま鼻歌歌っちゃって……。学校とかで噂になってないかな？ 変なおばちゃんが歌ってたって。……『だんご3兄弟』、知ってる？（と、鼻歌で

リク 歌い出す、が）

鴨原 な、なってないです。

リク え？

鴨原 噂に、なってないです。

鴨原 ああ……。 （また間があって） そうそう、だんごで思い出したんだけど、この前見たらしだんご買って帰ってたんだけど、まず家まで待ち切れなくて開けちゃって、こっそり食べながら歩いてたのね、こうやって。そしたら石ころに思いっきりつまずいちゃって、とんでもない転び方しちゃって！（と、そのポーズを取り始める） なんか、こういう感じでいつっちゃって、そしたらだんごの串が心臓のそばにグサってささってて、一歩間違えたらこれ死んでたなって！

リク ……。

鴨原 （変な姿勢から戻って） あのね、リク君。これは真剣な話なんだけど。

リク なんですか。

鴨原 私、沈黙が苦手らしくて。誰も喋らないと「あれ、この空気大丈夫？」って思っちゃって、焦って何か喋ろう、会話を弾ませようとするんだけど、そうするとね、いつの間にか自分の恥ずかしい話とか、本当は言わない方がいいような話とかをベラベラしゃやうみたいで……。身を削ってしまうというか。つまり何が言いた

いかというと、私、このままだとピンチなのね。このままだと、多分、大変なことになる。

……そうですか。

だから、リク君からも何か話してくれると嬉しいな。

……聞かれてないから。

え？

何が聞きたいか、聞かれてないから。

……じゃあ、リク君は何年生？

4年生。

好きな教科はある？

……あんまりないけど、理科とか。

そうなんだ。逆に苦手な教科は？

体育。

血液型は？

A型。

好きな食べ物？

チンジャオロース。

青椒肉絲？ 洪いね。じゃあ、逆に嫌いな食べ物？

飲み物だけど、牛乳は飲めない。

そうなんだ。じゃあ……最近、ハマってるものとかある？

……。

ゲームとかスポーツとか、音楽とか。

……。

あれ、もしかして答えにくかったかな？

……（笑う）。

え、なんで笑ってるの？ （間）……あ、もしかして。

（笑う）

ああ……やばい、すっごい恥ずかしいこと話しちゃいそう。お腹から何かがせり上がって来てる。まずい。まずいって！

（笑う）

あの、私、高校生の頃に……

『ONE PIECE』

え？

ハマってるもの。『ONE PIECE』

ワンピースって、服？

漫画。お兄ちゃんのだけど。見る？

鴨原 ……うん、見たい。

二人、退場。

◇

後日の夜。リク、急いで居間に入ってきて、テレビの前に座る。鴨原、続いて入ってくる。

鴨原 始まっちゃった？

リク もうすぐ。

鴨原 ワンピースって、アニメもやってるんだね。

リク 当たり前じゃん。

鴨原 当たり前、か？

リク どこまで読んだ？

鴨原 え？

リク マンガ。

鴨原 ええとね……今あそこ、やだ、ど忘れしちゃった、あの……ト、トナカイ。

リク チョッパ。

鴨原 そう、チョッパー！ が、出てきたところ。

リク まだそこ？

鴨原 いや、来る度に頑張って読んでるんだけど……。

リク アニメももう、もっと先やってるんだよ。

鴨原 そうなんだ。じゃあ、また来た時に読み進めないと……あれ？

リク 何？

鴨原 時計……また遅れてるかな。だってもう始まるもんね。

リク その時計、当てにならないから。

鴨原 また直しておかないと。

リク いいのに、なんとなくで。

鴨原 私、気になっちゃうの、こういうの。

リク ふーん。

鴨原 ……ねえ。

リク 何？

鴨原 前から気になってたんだけどさ。

リク うん。

鴨原 帽子、好きなの？

リク ……なんで？

鴨原 いつも、かぶってるから。

リク 変？

鴨原 変じゃないよ？ カッコいい。

リク 本当に？

鴨原 うん、素敵だよ。

リク ……なんか、安心するから。かぶってると。

鴨原 ライナス君だ。

リク 誰それ。

鴨原 知らないか。

リク うん。

でも、分かるよ、その気持ち。いいなあ。

リク、鴨原に帽子をかぶせる。

鴨原 ……どう？

リク いい感じ。

鴨原 よかった。

リク (帽子を取り戻し) 始まるよ。

番組が始まり、見入る二人。場転。

⑦

現在。座卓を囲む町田と三塚。飲みかけの午後ティーと、まだ袋のままの柿ピーが置いてある。

町田 (考え込んでいる)

三塚 ……お父さんの知り合いのような感じだったけど。

町田 年も近いんですよ。

三塚 60とかかなあ。

町田 うーん。(時計を見て) 時計ねえ。てか引き留めといってくればよかったのに。

三塚 だって、一人でベラベラ喋ってこれだけ置いて行っちゃうんだもん。爆弾じゃないの？

町田 時限爆弾？

三塚

うん。

町田

ないでしょ。

三塚

いや、ないけどさ。でも、なんか変な人だったから。

町田

え、何、不審者ってこと？

三塚

いや、分かんないけど。脈絡とかないかもよ？

町田

不審者が知らない人の家上がり込んで時計置いて帰っていったってこと？

三塚

うん。

町田

それは……不審すぎるだろ。

三塚

不審者だからね。

町田

シュールすぎない？

三塚

不審者ってシュールでしょ。

町田

いや、なんかちよつとトリッキーというか。

三塚

家、勘違いしてるとかは普通にあるんじゃない？ お年寄りだし。

町田

……でも、なんとなく見覚えはあるのよね、この時計。

三塚

……それを早く言つてよ。

町田

いや、本当になんとなくよ？ 分からないけどさ……。

三塚

近所から順番に思い返してみたらいいじゃん。どうせそんなに人いないんだろうし。

町田

うーん、そんなにいないっていうか、いないんだよなあ。

三塚

え？

町田

空き地ばかりだし、この辺。

三塚

向かいっていうか、斜めのところに一軒あったでしょ。

町田

あ、榎本さん？ あそこはとつくに空き家よ。一応賃貸に出してたみたいだけど、借り手はつかんよね。まだ出してるのかな。

三塚

……この、区画？入ってくる時に建ってたのは？

町田

千葉さんとも子供は出ていって親も施設入ったから誰もおらんね。まあ、解体

三塚

するにもお金かかるからね。更地にすると固定資産税もややこしいし。

町田

……あの、奥の方に建ってた平屋みたいな、

三塚

あれはただの倉庫だよ。

町田

……あのさ、

三塚

何か思いついた？

町田

いや、てか時計、もういいわ。

三塚

何何、どうしたの。

町田

……え、大丈夫？

三塚

何が。

町田

この辺。

町田 この辺のことは、この辺に聞かなきゃ分らんけど。

三塚 いや、そういうのいいから。え、この辺誰も住んでないの？

町田 だから言ったじゃん、いないって。

三塚 ゼロ？

町田 ゼロ。

三塚 人間、いないの？

町田 うん、人間いない。

三塚 ……え、私、違う世界来ちゃった？

町田 どういうこと？

三塚 私……異世界転生してる？

町田 異世界？

三塚 待って、ひょっとしてこれから私……無双するの？

町田 ごめん、ちよっと何言ってるか分からないんだけど。

三塚 ねえ、私はいつたいどうすればいいの？ この人が死に絶えた世界で。

町田 死に絶えてない死に絶えてない。いや、この区画？番地？は確かにいないけど、

車で走ってきた時は普通にいたでしょ。カート押してたおばあちゃんとか、信号待ちのところ。

三塚 ……あれも人ならざる者。

町田 なんだろう、ジャンルが分からないんだよな。

三塚 恐らく狐か狸、あるいは老いた化け猫……。

町田 あの、さっきからいろんな方面にうつすら失礼だからね？

三塚 ……ごめん、ちよっと取り乱した。

町田 独特な取り乱し方だね。

三塚 なんとというか、思った以上だったから。

町田 田舎っぴりが？

三塚 田舎……っていうのかな。陸の孤島？

町田 言うね。

三塚 だって……。

町田 まあ、確かに陸の孤島かもね、ここは。だから面倒な近所付き合いとかもないけどね。そういう意味ではある意味都会とも言える。

三塚 ……ちよっとよく分からないけど。

町田 慣れれば住めるから、普通に。車は要るけど、それはどこもそうでしょ。

三塚 ……だから、私も住めるって？

町田 住もうと思えばね。

三塚 ……住めと。

町田 ……実際にこれからどうするかってのは、だから、これから話そうってことだから。あと、まあ確かに今はこの辺誰もいないけど、別にちょっと前まではいたわけだし、それはたまたまでもあるから。

三塚 みんな、出ていく必要があったから出て行ったんでしょ。

町田 いや、そうかもしれないけどさ……。

三塚 ごめんね。大切な家なのは分かってるよ。子供の頃から過ごしてきたんだもんね。

町田 いやいやいや、俺も言いたいことは分かってるよ、もちろん……。

間。

三塚 帰ってこないね。

町田 いや、もう、ほんとごめん。

三塚 連絡してるんでしょ？

町田 LINEも既読付かないし、電話もしてるんだけど……。

三塚 それ、そもそも大丈夫なの？ 無事なの？

町田 いや、まあ、こんなもんなんだよ。探してこようかな。

三塚 当て、あるの？

町田 特にないけどさ。まあ、もうちょっと待つか……。

三塚 食べていい？

町田 え？

三塚 柿ピー。

町田 ああ、もちろん。

しばし、柿ピーを食べる。

町田 好きだよね、柿ピー。

三塚 うん、好き。

町田 柿ピーっていつからあるかって知ってる？

三塚 知らない。

町田 昔の帝国ホテルのバーで出たのが最初らしいよ、一説には。

三塚 へえ。

町田 どこで聞いたんだっけな。

三塚 私に聞かれても。

町田 でも面白い話だよな。もっと好きになったでしょ。

三塚 好きって、そういうことじゃないけどね。

町田 ……まあ、そうか。

間。

三塚　ねえ。

町田　うん。

三塚　私、一人っ子でしょ。

町田　うん、知ってる。

三塚　きょうだいがずっと欲しかった。男の兄弟はいいかな。お姉ちゃんか妹がいたらいいのにも思ってた。

町田　そうなんだ。

三塚　やっぱり一人は全然違うから。日常も、経験も。きょうだいがいる人の感覚は、やっぱりよく分からない。

町田　うん。

三塚　だから、できるだけ私からは余計なこと言わないようにしてきたつもりなのね。詮索もしないように。

町田　……うん。

三塚　でも、それは、あなたの方からちゃんと言葉にしてくれると思ったから。

町田　それは……もちろん。今日だって、大事な話をするために、こうして来てもらってるわけだから。

三塚　うん、それは分かっている。でも、ここまでも長かったから。私たち、付き合って何年？

町田　……それは、ごめん。無責任でいたつもりはないんだけど、いろいろ考えなきゃいけないことも多かったから。

三塚　そうなんだろうね。でも、一人っ子にはやっぱり分からないかも。

町田　これからちゃんと話すよ。

三塚　じゃあ一つだけ教えて。

町田　うん。

三塚　兄弟って、一生兄弟じゃなきゃいけない？

町田　……まあ、兄弟は兄弟だからね。

三塚　……そっか。

行晴と鴨原が話しながら入ってくる。

行晴　なんか、すみません。家の片付けまで手伝っていただいて。

鴨原　そんな、全然。好きなんです、片付けとか掃除とか。

行晴　玄関の下の隅とかホコリだらけで、お恥ずかしい限りです。

鴨原 どこも、そんなものですよ。できる時に一気に、ですよ。

町田 やっぱり俺、探しに行ってくるよ。

三塚 どこに？

町田 分からんけど、その辺車で回ってみるよ。駅までの道とか、公園とか。

町田、退場。

⑧

過去。ただし三塚はまだ残っている。

行晴 今日、これからお仕事ですよ。

鴨原 ええ、遅番なので、夕方からスーパ―閉まるまでです。

行晴 お時間、大丈夫ですか。

鴨原 はい、もう少しなら。

三塚 逃げやがった！

行晴 車で送りますよ。

鴨原 え、いいんですか。

行晴 もちろん。……あ、柿ピー、よかったら食べてください。

鴨原 あ、柿ピーだ。

行晴 お好きですか。

鴨原 実は、めちゃくちゃ好きです。

行晴 そうですか、それは良かった。

以下、行晴、鴨原、先ほどの柿ピーを食べながら。たまに三塚も食べる。

行晴 柿ピーっていつからあるか知ってますか？

鴨原 いつからなんですか。

行晴 帝国ホテルで出されたのが最初っていう説があるらしいですよ。

鴨原 へえー。

三塚 (柿ピーを大量に食べながら) ああ、むかつく……。

鴨原 ミナト君とリク君は。

行晴 日も長いですし、まだ帰ってこないでしょう。

三塚 (めちゃくちゃ食う) むかつくむかつく……。

三塚のせいで柿ピーがなくなる。三塚は柿ピーが喉に詰まったようで、午後ティーを飲もうとするがほとんど飲み終えていることに気付き、うなりながら退場。

鴨原 (柿ピーがないことに気付き) えっ? なんかすみません! 私凄く食べちゃったみたいで……。

行晴 いえ、そんな……。気に入っていただけてよかったです。

鴨原 いつの間に、こんな……。

行晴 あの、今度はもっと買ってきますから、業務用みたいなのか、あるか知りませんけど。

鴨原 いや、全然そんなつもりじゃなかったんです。

行晴 ありますよね……。気付いていたらっていう……。何につけても。

鴨原 ごめんなさい、本当に。

行晴 だって、ねえ、そんなこと言ったら、全体的に、気付いていたらっていう感じじゃないですか、この状況が。

鴨原 それは……確かにそうですね。

間。

鴨原 なんで、こうなったんですかね。

行晴 なんででしょうね。

鴨原 もう、どれくらいになりますか。

行晴 うちに来ていただいてからでも、もう2、3カ月ですかね。本当に、なんでこうなったんだか。

鴨原 それは、行晴さんが来てって言ったからですよ。

行晴 それは、分かってますけど。

間。

行晴 あの日は、待ってたわけじゃないですよ。
鴨原 はい。

行晴 あの日は仕事で疲れてしまって、買い物を終えても家に帰れなくて、それで、レジ袋を抱えたまま駐車場の車止めに座っていたんです。そしたら、従業員用の通
鴨原 用口から、あなたが出てきた。

行晴 いつも、あの時間で終業なんです。

鴨原 あなたの方から話しかけてくれて、ね。

鴨原 知らない顔ではなかったですから。でも、たまたま目が合っちゃったから「どうしたんですか」とお声がけしただけです。まだ仕事の頭だったといか、サービスですね。

行晴 そんなもんでしたか。

鴨原 そしたら、なんだか長話になってしまつて。

行晴 同僚の方が時折ジロジロ見てましたよ。

鴨原 どんな関係に見えたでしょうね。

行晴 気になりませんでしたか。

鴨原 気にする理由もないでしょう。

行晴 まあ、そうですか。

鴨原 ええ。

間。

行晴 あの……リクことは助かっています。

鴨原 いえ、そんな。

行晴 本当に珍しいと思います。あれだけ他の人に懐くなんて。

鴨原 多分、大人に見られていないんでしょうね。お友達みたいな感じで。

行晴 それができるのが凄いです。

鴨原 自然とそうなっちゃってるだけです。

行晴 リクにとっては同じことです。相変わらず、日によっては押し入れに引きこもってますけど、楽になってるところはきつとあると思います。

鴨原 それなら、よかったです。

行晴 ええ。

鴨原 でも……ミナト君はなかなか……。

行晴 いやいやいやいや、そんな、こちらこそ申し訳ありません、礼儀を教えられてないもので……。あいつはもう、仕方ないです。そういう時期ですから。

鴨原 そうですか。

行晴 ほうっておくしかないですよ。

鴨原 ……あの、一つお聞きしてもいいですか。

行晴 はい。

鴨原 「ホーム」ってなんですか。

行晴 え？

鴨原 あの、最初の日にミナト君が言ってた……。

行晴 ああ……鴨原さんのお住まいの辺りがホームです。

鴨原 はあ。

行晴 ここで問題です。では、この辺りはなんでしょう？
鴨原 え？

行晴 この辺りは「ビジター」です。
鴨原 ビジター。

行晴 野球の言葉から取ってるんでしょうね。代々この土地に根付いてきた地域がホーム、このような新興住宅地がビジターです。

鴨原 ……なんか、嫌な感じですね。

行晴 最初は誰か一人が言い出したんでしょうが、すっかり学校で流行ってしまったみたいで。ここはよそ者の場所なんです。なぜだか、鼻持ちならない金持ち連中みたいに思われてましてね。お金なんか分けてほしいくらいですよ。

鴨原 そうだったんですね。

行晴 リクは元があんな性格で、口数も少ないですから、多勢に無勢で苦労も多いみたいなんです。私もなんとかしようとは思ってるんですが……。ミナトもそれで警戒してるようなところがあると思うんです。許してやってください。

鴨原 ……ええ。

行晴 しかし、今どき野球なんですかね。Ｊリーグもできて随分たったじゃないですか。サッカー風に言えばビジターじゃなくてアウェイなんですけどね。まあどっちにしろ一緒か。

鴨原 ……あの。

行晴 はい。

鴨原 私、離婚してるって言ったじゃないですか。

行晴 ええ。

鴨原 子供ができなかったからなんです。

行晴 ……そうでしたか。すみません、どうしても子供の話ばかりになってしまっ…
…。

鴨原 いえ、そういうことじゃないんです。

行晴 え？

鴨原 見合い結婚で、正直に言えば、心が動いた相手ではありませんでした。でも、向こうも一緒だったと思います。流された私も悪いんですけど、周りが当然のように結婚相手を決めていく環境だったんです。そういう経緯なので、子供ができないければ離婚するというのはごく自然なことでした。ただ……今でも後悔してるのは、私から別れを切り出す形にしてしまったことです。それで、何もかも私のせいということになりました。向こうの体裁のためです。

行晴 ……そうですか。

鴨原 田舎なんて……ホームなんて、いいものじゃないですよ。

間。

行晴 ここも、ホームです。

鴨原 え？

行晴 家ですから。

鴨原 ……ああ、まあ……。

行晴 ホームがいくつあってもいいじゃないですか。そのうち一つでも気に入れば、それでいいじゃないですか。

鴨原 ……ありがとうございます。

行晴 お礼なんか、こちらが足りないばかりですよ。特にリクのことなんか。

鴨原 そんなことないです。むしろ逆ですよ。

行晴 逆？

鴨原 なんて言ったらいいのかわからないですけど……リク君と遊んでいる時間が、今の私にとってはすごくありがたくて……。いろいろあって、最近の生活はなかなか元気が出なかったものですから。だから……大切にしたい時間なんです。

行晴 ……そうですか。

鴨原 あと……これ（時計）も。

行晴 え？

鴨原 （携帯電話（ガラケー）を取りだして、画面を行晴に見せる）ほら。

行晴 あ……またズレてますね。

鴨原 そうなんです。私、気付いた時には直してたんですけど、いつの間にかまた遅れてしまっ。

行晴 針が馬鹿になっちゃってるのかな。もう随分、古いですから。捨てちゃいましょうかね（と、時計を鴨原の手から取ろうとする）。

鴨原 （それを拒み）いや……いいんです。

鴨原、時計の針をゆっくりと直す。

鴨原 おこがましいんですけどね。こうして針を直していると、私もこの時間にいてい

いのかなって、そう思えるんです。自分の中で、何か大きなものを取り戻しているような、そんな気がするんです。

行晴 ……鴨原さん、鴨原さんは、大丈夫です（と、鴨原の手に自分の手を添える）。

鴨原 ……あ。

行晴 え？

鴨原 （時計を見せて）もう行かなきゃ。

行晴 あ、そうですね。（以下、移動しながら）車出しますね。

鴨原 本当にいいんですか。
行晴 もちろん。鴨原さんは、運転は。
鴨原 はい、できます。
行晴 今度は迎えに来てください。
鴨原 え？
行晴 今の部長が酒飲みで、会社終わりにずっと付き合わされるんですよ。帰る頃にはバスなくなっちゃって、タクシー代が馬鹿にならないんですよ……。

二人、退場。

⑨

現在。日は落ちかけ、雨が降りだしている。三塚、町田、コーヒーを持って入ってくる。二人、藤椅子に座る。

三塚 (コーヒーを飲んで) 熱い。
町田 ……(目をゴソゴソやっている)。
三塚 何してるの？
町田 いや、コンタクトが調子悪くて。
三塚 洗ってきたら？
町田 いや、さっき洗ったんだけど、やっぱこの部屋埃っぽいわ……。
三塚 ……なんか、のんきね。
町田 のんきって、コンタクトは大事でしょう。
三塚 そっちが怒らないでよ。
町田 別に怒ってないでしょ……。
三塚 ……雨も降ってきたし。
町田 急にね。ちよつと前とか凄かったよ。土砂降り。
三塚 車で探してた時？
町田 まあ……。
三塚 帰ってこないね。
町田 うん。
三塚 私、嫌われてるのかな。
町田 そんなことないよ。
三塚 じゃあなんで？ なおさら意味分かんないじゃん。
町田 そうなんだけど、こういう感じとしか言えないんだよ、それは……。

三塚 ……ねえ、本当にどうするの？　これから。

町田 だから、それは、

三塚 私とか関係なく、普通に。どうするの？　ご両親も、もういないんでしょ？

町田 いないから俺が、ってなってるんじゃない？

三塚 病院とか行ってるの？

町田 そりゃいろいろ考えているよ？　もちろん。さっちゃん、病気とか、そういうことを安易に決めつけたら駄目だよ。詳しく知らないんだから。

三塚 決めつけてないし、私は最善を尽くしてるのかって聞いているの。なんでそんな上からなの？

町田 だって実際そんな知らないでしょ？　状況とか。

三塚 それはあなたが教えてくれないからでしょ？

町田 ……そうだね、そうかもしれない。それは悪かった。……でも俺は根本的にはこう思うよ。世の中がもつとまともなはずだと思って生まれてきただけの人つかまえて、ちよつとやる気なくしたら無気力だの怠け者だの甘えだの言ってる世間の方がおかしいってね。馬鹿でまともじゃないのはこっちなんだから。馬鹿ならせめて、まともな人のためになすべきことがあるんだよ。違う？

三塚 ……ごめん、言ってること分からない。

町田 すぐには分からなくていいよ。

三塚 ねえ……何があったの？

町田 何が？

三塚 こうなるのに。

町田 別に何があったってわけじゃないよ。

三塚 だって、やっぱりおかしいよ、ちよつと。

町田 おかしくないって。そんな、なんでもかんでも分かりやすい理由があるみたいな考え方、好きじゃないけどな。

三塚 ねえ、私の目を見て。

町田 何よ……。

三塚 お願い……教えて。

町田 だから別に何も……！

⑩

過去。鴨原が入ってくる。

鴨原

（電話）……ええ……そうなんです、リク君がちょっと……。喘息の発作が起きてしまっていて……。結構ゼーゼーしてますね……。あ、行晴さん、お仕事中、電話大丈夫でしたか？ ……そうですか。あ、私は今日非番だったので、ちょっと顔出してみようと思って……。リク君、出てくれたんですけど、その時からもう結構……。学校にいる時は出てなかったらしんですけど。

リク、上手から出てくる。苦しそうな様子。

鴨原

あ、リク君、大丈夫？ 部屋で休んでいいよ？

リク

水飲む……。

鴨原

そうだね、今入れてくるね。

リク

大丈夫、自分でやるから……。

リク、下手に退場。

鴨原

（電話）……もしもし？ あ、聞こえました？ そうなんです、結構出ちゃってて……。あの、手持ちの吸入ですよ、シュコシュコっていう。リク君、自分でやってみましたけど、全然収まらないですね……。あ、病院でやる吸入……が、あるんですね。そうですね、行った方がいいかもしれないです。……ええ、知っています。国道沿いの、ちょっと遠いですよ。はい、もう、私は時間大丈夫ですよ、連れて行きます。……あ、車、いいんですか？ そうですね、キーは玄関の靴箱の上の……ですよ。あの、保険証とかって……。あ、台所の壁掛けの、はい、分かると思います。じゃあ……。そうですね、また分からないことあったら連絡します。はい……。はい。（人の気配を感じ）リク君、じゃあ私と病院……。

振り返ると、そこには制服姿のミナトが立っている。

鴨原

あ、ミナト君、おかえりなさい……。

ミナト

……。

鴨原

ミナト君？ ……あの、リク君がね、ちょっと喘息が出ちゃって。

ミナト

病院。

鴨原

……あ、聞こえてた？ そうそう、だから私、連れて行こうかと思って。

ミナト

連れて行きます。

鴨原

……え？ あ、いや、私が連れて行こうかと思って。

ミナト

俺が連れて行きますよ、一人で。

鴨原 ……ミナト君、帰ったきたばっかりで疲れてるでしょ？ 部屋でお留守番してて

いいよ。制服も着替えた方がいいし。

ミナト 全然疲れてないんで。

鴨原 ……じゃあ、一緒に行く？ 私、車運転するから、ね。

ミナト なんですか。

鴨原 え？

ミナト なんで、勝手にうちの車運転するんですか。関係ないじゃないですか。

鴨原 ……いや、あのお父さんの方からね、使っても（いいよ）っていうことで、電話でね。ほら、買い物で運転代わったりとか、お父さん飲み会で遅いときに駅まで迎えに行ったりしてたから。こう見えて私、運転は下手じゃないと思うよ。

ミナト そういう問題じゃないですよ。まあ、父もおかしいんですけどね。

鴨原 ……分かった。じゃあ、タクシーで一緒に行こうか。

ミナト タクシーだったら普通に2人で行けるんで。

鴨原 そうかもだけど……私、暇だからじゃんじゃん使ってもらいたいなー、なんて。

力になりたいなって。

ミナト 無理じゃなくていいですよ。

鴨原 いや、ホント、無理とかじゃ全然なくて……。

リク、戻ってくる。

鴨原 リク君。

ミナト リク、行くぞ。

リク ……え？

鴨原 ミナト君、タクシー呼ばないと。私、呼ぶね。

ミナト 通り出たら普通につかまるんで。

鴨原 ……あ、お金、大丈夫？ タクシー代と、病院代と。私、全部出すから。

ミナト あるんで大丈夫です。

鴨原 （行きかけるミナトに）……ミナト君！ 私、何か駄目なところあるかな。あつたら直すから。だから……ちょっとでいいから仲良くしてくれないかな。

ミナト ……いいです。

鴨原 え？

ミナト 仲良くしないでいいですよ。他人なんで。

ミナト、リク、退場。

三塚 ……ねえ、どうしたの……？ 聞こえてる？ 理空君……理空君！

⑪

再び、現在の、先ほどの場面。雨の音が戻る。藤椅子の二人。

町田 （呆然としていたが）……あ。

三塚 大丈夫？

町田 いや……うん。

三塚 水とか飲む？

町田 （三塚に）あったな。

三塚 え？

町田 いろいろあったな。いろいろあったわ。まあ、そりゃそうか。

三塚 どうしたの？

町田 なんて言ったらいいんだろうな……ポカリか。

三塚 え？

町田 ポカリ。

三塚 飲みたいの？

町田 って、デザインがほとんど変わらないのね、今も昔も。

三塚 うん。

町田 で、今も昔も売れまくってるからそこらじゅうで見かけるのね。

三塚 ……うん。

町田 つまり、忘れてたわけではないんだ。

三塚 （要領を得ず）理空君？

町田 忘れてたわけではないんだよ。

⑫

車の音。過去。路上。先ほど病院に行った後。ミナトが先を歩く。リクが後ろを追いかける。

リク ねえ。

ミナト ……。

リク ねえ。

ミナト なんだよ。

リク 疲れた。

ミナト 疲れんなよ。

リク 遠いよ。

ミナト 大したことないだろ。

リク、情けない声を上げながらベンチに座る。ミナトも仕方なく座る。

ミナト ポカリ飲めよ。

リク 飲むけどさ……はあ。

ミナト なんだよ。

リク 帰りのタクシー代、確認しといてよ……。

ミナト いや、それは悪かったけどさ。でも、リクだって聞いてくれればよかったのに。こっちだって急いでたんだから。

リク 無理だよそんな、発作起きてたんだから。

ミナト そうかもだけどさ、まあ別に歩こうと思えば歩けない距離じゃないんだから。遠いって。

ミナト 発作も病院で治してもらったんだから、元気だろ。

リク 歩いて帰るためじゃないし。

ミナト まあ、もういいじゃん、こうなったものは、どうしようもないんだから。

リク ……電話かければ良かったのに。

ミナト 電話？

リク 病院の公衆電話から、鴨原さんに。

ミナト なんだ。

リク 車でもタクシーでも迎えに来てもらえばよかったじゃん。

ミナト 面倒臭いよ。携帯の番号知らんし。

リク 家の電話でいいじゃん。いたんだから、家に。

ミナト 家にいるのも、おかしいけどな。うちの車運転するのだって、当たり前前に言ってるけど意味分かんないしな。

リク ……ほら、やっぱり。

ミナト なんだよ、やっぱりって。

リク 結局、鴨原さんが嫌いなだけじゃん。

ミナト 嫌いっていうか、知らない人だから。

リク 知らないじゃないじゃん。お父さんのお友達でしょ？ 家のこと手伝ってもらってるだけじゃん。もう来てずいぶんたってるのに、いつまで言ってるんだよ。

ミナト 知らない人は知らない人だろ。知らない人ってか、不審者だな。車なんて一緒に乗ってみろよ。さらわれるぞ。

リク 何言ってるの？ 馬鹿じゃん。それで、わざわざお金払ってタクシー？ もったいないな、お小遣い。

ミナト 弟を病院に送ったんだから、後で請求するよ。

リク でも必要なお金じゃないんだから。無駄遣いなんだから。いけないんだ。

ミナト ちよつと待って、さっきからなんでそうなふうに言うんだよ。これ全部リクのためにやってるんだからな？

リク じゃあ僕が誰と仲良くしたっていいだろ！

ミナト ……。

リク お兄ちゃん、最近おかしいよ。

ミナト 元からだよ。

リク 結局、焼き餅じゃん。僕とお父さんが鴨原さんと友達になってるからって。子どもじゃん。

ミナト ……そうだな。じゃあ、そういうことでいいよ。

リク なんだよそれ。ずるい言い方。

ミナト リクには分からんから。

リク ……え？

ミナト 別になんでもないよ。

リク お母さんのこと？

ミナト お母さん？

リク 分からないって、お母さんのことでしょ。

ミナト そうは言っていない。

リク 分からないに決まってるじゃん、覚えてないんだから、何も。悪いかよ。思い出があるのがそんなに偉いのかよ。しょうがないだろ、小さかったんだから。なんだよ、人が気にしていること言ってる。お母さん、関係あるの？ 何年前の話？ じゃあもつとダサイじゃん。お母さんお母さんって。赤ちゃんじゃん。

ミナト ……ごめんな、悪かったよ。俺が悪かった。

リク ……。

ミナト そうだな。全部リクの言う通りかもしれないな。

リク ……ずっと歯切れ悪いし。かもしれないってなんだよ。自分のことでしょ。

ミナト ……分からないんだよ。

リク え？

ミナト 分からないんだよ、なんにも。

リク ……なんだよ、それ。

ミナト なあ、俺がお母さんのことで一番覚えてること、教えてやろうか。

リク ……こんな話した後で？ 意地悪じゃん。

ミナト

まあ聞けよ……。暑い夏の日、俺は庭の隅っこに這いつくばって、蟻を目で追いかけていた。蟻の小さな体は何匹かで列をなして、音も立てずに何かを運んでいた。聞こえるのは蝉の声と自分の呼吸だけだった。汗が首筋を流れた。膝が砂利に当たって痛かった。意味なんか何もないけど、その時、ふと腑に落ちるんだ。

リク

……。

ミナト

これが一番覚えてること。不思議だよな。お母さんといった時の記憶はどんどん薄れていくのに、あのなんでもない日の、なんでもない瞬間の、あの気持ちだけが、心に黒々と残ってるんだよ。みんな、そうなんかな。それとも俺がおかしいのかな。そういうものなんかな。

リク

……。

ミナト

リク……見捨てるなよ。

リク

……え？

ミナト

（立ち上がり）ちよっと行くとこあるわ。

リク

……どこ行くの？

ミナト

あ、そういえば一つ話し忘れてたな。

リク

何？

ミナト

リクの分からない話。意地悪したと思われたままじゃ気い悪いからな、全部話しとくわ。

リク

……何の話？

ミナト

エローい話だよ。

……そして、リクは訥々と話します。ミナトは、いずれ去る。

リク

……それから、お兄さんは一通り話をした後、どこかへ行ってしまった。病院で吸入を受けたとはいえ、体調不良だったにもかかわらず、僕は一人で家まで帰るはめになった。後になって思えば、僕はこの時、お兄さんがどこへ行ったのか、考えを巡らせるべきだった。しかし僕は、学校をサボるお兄さんのことだから、どうせまた適当にそこら辺をブラブラしてくるのだろうとしか考えられなかった。何より、僕の頭の中では今しがたお兄さんから聞いた話が、暗い波となって激しく渦を巻き、深い思考を妨げていた。

お兄さんは、父と鴨原さんを街で見たという話をした。話をしている間、お兄さんはふざけているようにも、苦しげであるようにも見えた。

聞いている僕はといえば、その話がどういう意味を持つのか、正確には理解することができなかった。そもそも、父が平日の日中にこの街にいたということ自体、

何かファンタジーのようにピンと来なかった。事实は単に、こっそり休暇を取っていただけなのだろうが、とにかく僕はまだ小学4年生だった。

お兄さんに気付かないまま父と鴨原さんが二人で入っていったという建物に、自分はもちろん入ったことがなかったし、そこで男女がすることについての正確な知識も持ち合わせていなかった。当然のことながら、その建物が将来、葬儀社という、ある意味正反対の施設に変わるといふ皮肉など、知るよしもなかった。

僕はまだ小学4年生で、何も知らなかった。ただ……ただ、僕はその時、思った。父と鴨原さんがしたことは酷く不義理で、不誠実で、汚らしい裏切りなのではないだろうか。

それが実際のところ、どこまで罪深い行為だったのか、許されざることだったのか、後から考えても答えは出ない。必要以上に咎めるべきではないのかもしれない。ただし、その現場を中学生の息子に目撃してしまったこと、元を辿れば息子が学校をサボって街をふらついている事実を把握していなかったことについては、父親に完全な落ち度があったと言わざるを得ないだろう。

しかし、同時にこうも思う。僕があの時、お兄さんに何か正しい言葉を掛けてあげられていれば、少なくともその後の出来事は避けられたのではないだろうか。僕はお兄さんの心の空白を知っていた。母が死に、正義は果たされず、究極的には孤独でしかない、このままならぬ人生を生きることに心から同意できていないことを知っていた。でも僕は、それまでも、そしてその日も、お兄さんを気遣う言葉の一つも掛けてやることができなかった。結局のところ、甘えていたのだ。自分の困難さを盾に取り、弟として、お兄さんの庇護を受けるだけの存在でありたかったのだ。だから僕は、むやみに反発することしかできなかった。そして、一番言わなければいけないことを、とうとう言いそびれてしまった。

……そして、その日、お兄さんは自分の力で家に帰ることはなかった。

学校とは反対方向の畦道を抜けた先に大きな一級河川があつて、その手前には河川敷があつた。そこは、僕の残酷な同級生たちがよく遊んでいるところだった。ただし、遊んでいる頻度としては団地の中央公園の方が多かった。お兄さんは恐らく、中央公園に行ったのちに河川敷に向かったのだろう。

草野球に使われる開けた空間の先、水際の、背の高い植物が生えたなりになっているところで、お兄さんは忘れられたホームランボールと一緒に見つかった。今にも途切れそうな息の音は、前日の雨によって増水した川の轟音にかき消されて、頬に重なる草の上のダンゴムシにも届くことはなかっただろう。

バットがあればよかったのか。殺してしまっていた方がマシだったのか。

お兄さんが僕の同級生を殺しかけていると、やがて誰かが呼んだのか、彼らの兄やその友達がやってきた。お兄さんよりもっと年上の、中学の3年や高校生、中退した奴もいて、人数は5人とも8人とも聞いた。既に子供の面影を残さない、

成長期の遙か向こうへと行き切り、もはや全く別のグロテスクな生き物になった男の集団に、お兄さんは抵抗する術を持たなかった。お兄さんは、あるいは当然とも言える罰を受けた。どんな酷い目に遭ったとか、どんなに惨めだったとか、最後にポカリスエットをぶっかけられて虫がたかっていたとか、噂には限りがなかった。僕は何も信じなかった。ただ、病院で見た傷痕は言葉以上に語りかけてきた。お兄さんがあの日、ポカリスエットを持っていたことも覚えていた。病院からの帰り道、僕は心から、本当に心から不思議に思った。なぜお兄さんにはお兄さんがいないのだろう。なぜお兄さんにはお兄さんがいないのだろう。それは……僕が弟だからだ。僕が弟だから、お兄さんにはお兄さんがいないのだ。

リク、ポカリを飲み干し、走って退場。

⑬

再び現在。三塚と町田。

町田　今更だけどき。

三塚　何？

町田　（コーヒー）苦かったな。

三塚　……うん、ちょっと。

町田　……。

三塚　理空君。

町田　うん。

三塚　ありがとう。全部は分からないけど。

町田　うん。

三塚　本当は……ここからまた二人で、一步を踏み出すものなのかもしれないけど。うん。

町田　正直に言うと、あなたのこと、前よりも遠く感じてしまった自分もいるのね。

三塚　……そっか。

町田　ごめんなさい。

三塚　謝ることないよ。

町田　私ね、ずっと聞きたいことがあったの。それは、あなたにとって誰が一番大切なのかってこと。面倒臭いでしょ。

三塚　いや、そんな。

町田　今ならどう答える？

え？

ね、面倒臭いでしょ。

いや……。

いいの、何も言わなくて。聞いてみただけだから。

……さっちゃん。今ここで君だと答えるのは簡単だよ。でも、真剣に向き合いた
いからこそ、その場しのぎで雑なことはできるだけ言いたくないのね。まず、こ
の流れで心から信じてもらえらると思えないし。一番とか二番とか、そういう物
差して比べるものでもないというのは、きつと分かってくれると思う。

……うん、分かった。

正直に言うと、俺は自分が多くを望んでは思っていないのね。俺は俺の近くに
いる人たちを大切にしたいだけだから。きつといいやり方やタイミングがあるん
だよ。何事も、大事なものはタイミングなんだから。そこを見計らっていきたいん
だよ。

……いいタイミングなんて、ないのよ。

え？

勉強はね、一番遊びたい年ごろにやらなければならぬ。仕事はね、まだ働き
たくないと思いつながら地道に積み重ねていかないといけないの。この世の全ての
ことは、心が向いたときにはもう遅すぎるの。いつかなんて一生来ないの。

……。

結婚、私のタイミングって思ってる？ 私だって本当はもっとやりたいことある
よ。仕事だってそう、まだまだがむしやらに働きたい。でもね、考えなきゃいけ
ないから。結婚の、その先のことだって……でしょ？ タイミングなんて、悪い
時しかない。その瞬間は苦しくてつらいことばかり。後になって振り返って、あ
あ、あの時あしてよかったなと思えるかどうかだけ。生き甲斐ってそういうも
のでしょ？

……。

私はそんな人生を、あなたと歩みたいと思ったのよ。

……うん。

今日は帰るね、もう遅いし。

……そうだね、ごめん。車出すわ。

いいよ、自分で帰るから。

どうやって？

バスとか調べる。

もうないよ、バス。

じゃ、タクシーつかまえる。

タクシー走ってないよ、今はもう。

三塚 ……ホント、陸の孤島ね。

三塚、下手の玄関側へ退場。町田も追って退場しようとする、行晴と鴨原が現れる。

行晴 リク。

町田 ……。

行晴 部屋に行ってなさい。

町田 ……。

鴨原 リク君。

行晴 鴨原さん、大丈夫です。……リク、今の君の仕事は自分が元気でいることだよ。

自分のことだけ考えなさい。学校は、休みたければ休んでいいからな。

町田 俺がこの人……鴨原さんを見たのは、この日が最後になる。

行晴 リク。

町田、上手の部屋の方へ退場。

⑭

過去。夕方。

行晴 ……いったん、座りましょうか。（二人、座る）

鴨原 ……あの、お時間、大丈夫ですか。

行晴 もうすぐ出なきゃなんですけど……5時には。病院にはそれくらいと言ってるの
で。

鴨原 お仕事の方はどうですか。

行晴 会社には包み隠さず言ってますから。残業は極力なし、早帰り、遅出、できる限り
配慮してくれるそうです。こういう事態ですから、会社も鬼じゃないですよ。

鴨原 ……私、なんでもやりますから。掃除も洗濯も、買い物も。

行晴 ……はい。

鴨原 お弁当とか、作りますよ。スーパーでも調理場、入れるんで、こう見えて肉料理、
魚料理、なんでもいけますから。

行晴 ありがとうございます。でも……無理なさらないでください。

鴨原 そんな、今までだっていろいろやって来たじゃないですか。

行晴 ……そうですね。

鴨原 ……あ、時計、また遅れてないですか。私、直しますね。

行晴 あ、それは……大丈夫です。
鴨原 これからお忙しいでしょう。正確なのに越したことないじゃないですか。
行晴 本当に構いませんから。
鴨原 今、何分ですかね。携帯、どこだったかな。
行晴 そうじゃないんです、遅れてないと思います。あなたが先日合わせてくれたので、きつと、1秒も。
鴨原 いや、この時計、本当にすぐ遅れちゃうんですよ。私、電池も替えたんですけど。
行晴 それなんですが……いや。
鴨原 なんですか。
行晴 とにかく時計は大丈夫です。携帯で確認してもいいですよ。
鴨原 今、何を言おうとしたんですか。
行晴 なんでもないです。……本当に、なんでもないです。
鴨原 言ってください。
行晴 ……時計が遅れていたのは、わざわざ遅らせる人がいたからです。
鴨原 ……え？
行晴 わざわざ針を戻す人がいて、今はいないんです。
鴨原 ……ミナト君？
行晴 ……はい。
鴨原 ……あの、私、
行晴 いや、その……深い意味はないと思います。悪戯心というか。
鴨原 (息が荒い)。
行晴 鴨原さん？
鴨原 ごめんなさい、私、あの、急に頭の中がぐちゃぐちゃになってしまうことがあって……心が追いつかなくて、心臓がバクバクしてしまって、自分でもどうしたらいいか分からなくなってしまうて……。
行晴 鴨原さん、大丈夫です。落ち着いてください。
鴨原 でも……やっぱり全部私のせいなんですわね。
行晴 そんなことないです。
鴨原 あの日も、喧嘩みたいになっちゃったんです。ミナト君、私にすごく怒っていて、きつとそれで……。
行晴 そんなことないです、関係ないですよ。
鴨原 私はずっと間違ってたんです。私なんかが出しゃばっちゃいけなかったんです。受け入れられてもない癖に、人の気持ちも考えないで、偉そうに。
行晴 鴨原さん！
鴨原 私は……この家の時間にはいけなかったんですね。

行晴

違います！ 私が子供に向き合えていなかったんです。ミナトは大人になってきたと思っていました。そう思っているうちは親として何も分かっていなかったんです。だって、今年の初めは小学生だったんですから。私が愚かだったんです。それだけの話なんです。

鴨原

行晴さんは何も悪くないです。全部、全部、私が悪いんです。

行晴

鴨原さん、いったん落ち着きましょう。リクは？ リクはどうするんですか？ あなたはリクにとって必要な存在です。リクにとっての支えなんです。それは間違いないじゃないですか。……ね？ そうでしょう。だから……

いつの間にかリクが立っている。

行晴

リク、部屋にいなさいって……ああ、そうだ、お父さんそろそろ病院に行かないといけないから、その間、鴨原さんと遊んでなさい。一人よりそっちの方が楽しいだろう。お父さんも安心だから、な？

……出ていけ。

リク

出ていけ！

行晴

リク君……？

鴨原

全部お前のせいだ！ お前のせい……全部滅茶苦茶になったんだ！

リク

リク！ どうしたんだ！

行晴

ふざけんな！ バーカ！

行晴

やめなさい！ なんてこと言うんだ！

リク

お前も、お前も、みんな大嫌いだ！ 全部……全部知ってたんだよ！

行晴

……リク？

リク

馬鹿にするな！ 裏切り者！ 結局、みんな自分のことしか考えてないんだ！ だ
からこうなったんだよ！ 責任取れよ！ 返せよ！ お兄ちゃんを返せよ！

行晴

リク！ いいかげんにしなさい！

リク

出ていけ！

行晴

やめろ！

リク

早く出ていけ！

リク、部屋を飛び出す。行晴、後を追う。

鴨原、放心したまま座っている。と、防災無線から「夕焼け小焼け」が聞こえてくる。初めて盤面の見える時計は5時を指している。鴨原、顔を上げてメロディーの聞こえる方を向き、しばし呆然としたのち、時計を手に持ち、ぼんやりと見つめる。溶暗。

現在。深夜。居間は月明かりのみで暗い。

ミナト、居間に入ってくる。藤椅子に座り、しばしぼんやりした後、煙草に火をつける。おもむろに居間を歩き、仏壇の前で立ち止まると、しばし中を見つめる。

町田が出てくる。眼鏡を掛けている。

町田 あれ？

ミナト おう。

町田 どうしたのよ、いつ戻ってたの？ 彼女、とっくに帰っちゃったよ。

ミナト なんで眼鏡？

町田 いや、もう寝てたし。てかつけなよ、電気（と、電気をつける）。

ミナト 今日は悪かったな。大丈夫だった？

町田 え？ ブチギレてたよ。

ミナト そっか。

町田 当たり前じゃん。なんで、どっか行っちゃうのよ。

ミナト まあ……なんだろうな。

町田 なんだろうなって、なんだよ。

ミナト あ、煙草吸っちゃった、ごめんな。

町田 いいよ、別に。喘息、もう出てないし。まあそういうのはいいんだよ。何、珍しいじゃん。

ミナト 何が？

町田 ついに信仰に目覚めた？

ミナト いや……なんか（線香）挿さってたから。

町田 あ、そう、今日上げてくれたのよ。上げる？ てか上げようよ。

ミナト いいよ、別に。

町田 いいじゃん、減るもんじゃないし。線香は減るか。まあ、まあ、今しかないって。あれ、火、どこだっけ……あ。

ミナト、町田にライターを渡す。二人、線香を上げる。鈴を鳴らす音。

町田 ……5年前、父さんの葬式やったでしょ。

ミナト もう5年か。早かったな。

町田 働きすぎだったよ。

ミナト 働かせすぎたな。

町田 葬式、俺が喪主やってさ、次男なのに。

ミナト お疲れだったな。

町田 ああ、俺、人生で初めての葬式だって思ったんだよね。たまたま周り誰も死ななかったんだよな。まあ元から親戚にも縁ないし、友達もおらんのだけどさ。

ミナト それでいきなり喪主か。いったい誰のせいなんだろうな。

町田 本当だよ。でもさ、よく考えたら初めてじゃなかったんだよ。母さんの葬式に出ているはずだから。俺はそのこと自体を忘れてたんだよ。冷たい人間だよな。

ミナト 冷たくはないだろ。だって当時、何歳よ。

町田 忘れてたのは今だから。

ミナト ……誰だっけこれ、お釈迦様？

町田 ええとね、誰だったかな………忘れたわ。

ミナト ……信じちゃいないよ、神も仏も。

町田 うん。

ミナト ただ………なんだろうな、よく分からないものについて考えていたんだよな、最近は。

町田 うん。

ミナト 本当は、この世は分からないことだらけなんだ。でも、近頃はそれをつい忘れそうになる。ふとした瞬間に全てが分かりきっているかのように錯覚してしまう。分からないでいることは難しいな。うっかり忘れると、すぐに、分からせられてしまう気がする。

町田 そっか。

ミナト 思わん？

町田 俺は普通に分からないことばかりだよ。

ミナト そっか。

町田 ホント、何も分からんよ……。俺はさ、自分の周りのこの辺だけが幸せになったらそれでいいんだけどな。そんなに過ぎた望みかねえ。世知辛い世の中だよ。…

ミナト ……まあ、でも一度ぶっ壊してるのか、俺は。

町田 なあ。

ミナト ん？

町田 どうにかできたんかな。

ミナト ……え？ どういう意味？

町田 別に深い意味はないよ。

ミナト じゃあ、なんでそんなこと言うのよ。

町田 だから、何かが違ってたら、どういう変化があったかという、別に、それだけの話だよ。みんな思うでしょ？

町田 それで「どうにかできたかな」って？

ミナト

なんか、ごめんな。言葉のチョイスが怪しいんだよな。人と喋ってないからかな。……どうにもできなかったよ。兄さんには何もできなかったよ。何もできなかったし、何もしくなくていいんだよ。

ミナト

……。
俺にとって兄さんはね、神様だから。お釈迦様だから。だからお布施もするし、お供えもする。神様は何もしなくていい。ただそこにいるだけでいい。ただし、神様は信仰を拒否することもできない。残念な神様だな、可哀想に。

ミナト

……。
なんてな。冗談だよ。早く働けよ。

町田

……なあ。どこが好きなの？

町田

え？

ミナト

彼女の。

町田

何、急に。

ミナト

急じゃないでしょ。今日、それ言いに来たんでしょ。

町田

別に惚気に来たわけじゃないけど。……なんだろうな、急に言われると難しいな。

ミナト

共通点とか。

町田

共通点……はね、ない。

ミナト

ほう。

町田

俺と全然違う人間なんだよね。できることが全く一致してないとかさ。向こうは英語が割と喋れて、水泳とか得意でさ。俺はその辺、全然駄目。スケジュール管理も向こうはきっちりしてるけど俺はグダグダ。でも向こうは料理が全然できない。俺はできる。あとパソコン音痴だから、よくやり方教えてる。あと、俺の方が病院慣れしてる。

ミナト

何よ、病院慣れって。

町田

世の中には病院に慣れてない人がいるんだよな。俺、びっくりしちゃったよ。いつときヒール突っかけて骨にヒビ入ってさ。病院行こうって言ったらすごい嫌がるの。あんまり行ったことないから怖いって。手続きもよく分からないって。これだから健康な人は困るよね。

ミナト

それも理空の方が得意なことか。

町田

いや、これ大事でしょ。

ミナト

まあ、そうか……。

ミナト、座卓の上の時計に気付く。

町田

……なんか急に恥ずかしくなってきたな、寝るわ。(と、去りかけ、ミナトの様子に気付く) あ、そうだ、これ。

ミナト ……これは。

町田 何か今日、誰かが持ってきた。ウチのだって。

ミナト ……。

町田 いや、ちょうどいなかったのよ、俺。

ミナト ……。

町田 でも、誰が持ってきたか、なんとなく分かったかも。なんで時計かは知らんけど。
ボロいけど電池入ってて綺麗に動いてるわ。

ミナト ……そっか。

町田 ……寝るな。おやすみ。

町田、退場。

ミナト、時計を見つめる。

間。

やがて、仏壇の火を消し、玄関へ向かう。リクが現れる。

リク ……どこ行くの？

ミナト ちょっと出てくる。

リク ちょっとって、どこまで？

ミナト ちょっとだから、本当に。

リク 一緒に行く。

ミナト どうして。

リク 一緒がいい。

ミナト 一人で行くよ。

リク なんで？

ミナト 一人がいいんだよ。

リク 嫌だ。

ミナト リク……分かってくれよ。

リク ……ケチ。

ミナト ケチでごめんな。

リク 暗いけど大丈夫？

ミナト 大丈夫だよ。雨もやんだし、月も綺麗だ。

リク 一応傘持ったら？

ミナト もう降らないよ。

リク 寒くない？

ミナト 今日はあったかいよ。

リク 靴紐は大丈夫？ 知らない人についていっちゃダメだよ。トイレ行ついたら？

ミナト　なんだよそれ、心配しすぎだろ。

リク　心配するよ。心配したいんだよ。もっともっと心配させて。まだまだ全然、心配

し足りない。いくらしてもし足りない。お願い、お願いだから心配させて……。

ミナト　リク……ありがとうな。おやすみ。

ミナト、退場。リク、しばし立ち尽くした後、ミナトの去った方を振り返る。唐突に
暗転。

おわり

主要参考文献

『限界ニュータウン 荒廃する超郊外の分譲地』（吉川祐介著、太郎次郎社エディタス）